

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

地域で実習する基礎看護学実習の取り組みと今後の
課題：実習協力者の実習についての受けとめ方

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): 地域での実習, 実習協力者, 実習の受けとめ方, 基礎看護学実習 キーワード (En): 作成者: 谷岸, 悦子, 二重作, 清子, 小島, 通代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000135

著作権は本学に帰属する。

地域で実習する基礎看護学実習の取り組みと今後の課題

— 実習協力者の実習についての受けとめ方 —

State and Future Problem of Basic Nursing Practice in the Community:

— Cognizance of Volunteers for Practice —

谷岸悦子

二重作清子

小島通代

Etsuko Tanigishi

Kiyoko Futaesaku

Michiyo Kojima

日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

要約

4年制大学看護学科1年次における最初の臨地実習で、「地域で生活する健康な人」を理解することをねらいとして、地域での実習を実施した。学生の学習成果とともに学生を受け入れてくれた実習協力者の肯定的な反応が見られた。そこで、実習協力者の実習の受けとめ方を明らかにし、今後の実習指導のあり方を検討する資料とすることを、本研究の目的とした。

学生が訪問した実習協力者への「実習アンケート」のうち、自由記載の項目を分析対象とした。記述件数は、全部で109件であった。対象者が「良かったと思ったこと」は、話す機会がもてた満足、健康への意識、対話ができた満足、若者に対するイメージの変化、看護・学生への期待、大学の理解、の6カテゴリーに分類された。学生と関わることは、実習協力者が自分の経験・生き方を語る機会であり、日常を見直し、健康を考えるきっかけとなっていることが明らかとなった。また、学生が、実習協力者とともに、個々の健康や生活の質の向上や地域社会との関わりを考えることができる実習として、教育的関わりをより意識的に行なう必要性が示唆された。

キーワード

地域での実習 実習協力者 実習の受けとめ方 基礎看護学実習

1 はじめに

看護基礎教育における看護学実習は、学内で学んだ知識を統合し、看護の現場で生じている現象を分析的に捉え、対象にあった看護を提供することを学ぶ重要な学習の場である。特に基礎看護学実習は、看護の対象の理解や様々な対象とのコミュニケーションを学び、看護を考える重要な実習である。

本学では、1年次最初の基礎看護学実習（臨地実習）において、看護の対象である人間を生活する個人の視点から捉え、健康や環境との関連を知ることが重要であると考えた。そこで、「疾病をもち入院生活をする人」ではなく、「地域で生活する人」を理解することをねらいとして、地域における臨地実習として基礎看護学実習を実施した。このような試みは、いくつか行われているが、その実習の成果は学生側の学びとして報告されている。^{1) 2) 3) 4)} 本学でもこの基礎看護学実習における学生の学びは、「学生のレポート」分析から①対象者との出会い②対象者の理解③高齢者のイメージ変化④対象者からのメッセージ⑤自己の振り返り⑥今後の課題であることを明らかにした。⁵⁾ しかし、「地域で生活する人」が、看護学生の実習を受け入れたことでのメリットやデメリットについては、報告がみられない。^{1) 2) 3) 4) 5)}

そこで、今回は、実習の協力者が、基礎看護学実習で学生を受け入れたことを、どのように感じ・考えているのか、その受けとめ方を明らかにし、今後の実習のあり方および実習指導の課題を検討したので報告する。

<用語の定義>

地域で生活する人とは、自宅を生活の場として、日常生活を過ごし、学生との対話や行動をともにすることに支障がない人をいう。

2 研究の目的

看護基礎教育において、地域を実習場所として学生が初めて行う基礎看護学実習の学習状況を明らかにし、今後の実習指導の計画や実習指導のあり方を検討する資料とする。

今回は、実習協力者の実習の受けとめ方を明らかにし、看護学実習としての今後の実習指導のあり方を検討する資料とすることを目的とする。

<実習の概要>

この基礎看護学実習は、「地域社会において日常生活を送っている個人と生活の場で接することにより、その個人の生活と健康について理解を深めること、また、対話、観察、

参加、見学、調査を通して、人間と環境および健康の相互関連に気づき、看護の概念の習得に資することをねらいとしている。さらに、看護の基本的方法である対人接近および看護学における学習方法を実際に学ぶ入り口とする」ことを実習の目的としている。

大学の所在するM市のうち、コミュニティづくりのモデル地区となっている自由ヶ丘地域を行政の方々と相談して選択した。自由ヶ丘地域コミュニティへ実習の協力を依頼し、地区役員、民生員に実習協力者の推薦を戴いた。実習への協力承諾が得られた方の家庭へ、学生が2人1組となり、1回2時間～7時間、1日～3日の訪問をした。

基本的には、学生が訪問する方は1名としたが、結果的には、実習協力者の日程の関係で2名訪問する学生もいた。実習実施時期は、1年次の前期となる2001年9月第2週目の3日間である。実習の内容および実施経緯の詳細は、二重作ら⁶⁾により報告している。

3 研究方法

1) 対象

2001年度に学生が訪問した自由ヶ丘地区コミュニティに居住する実習協力者71名(男性28名、女性43名)のアンケートを分析の対象とした。

2) 分析の方法

学生を受け入れてくれた実習協力者に、実習終了後依頼した「実習アンケート」のうち、自由記載の「学生が訪問して<良かったと思ったこと><困ったと思ったこと>」の項目を分析の対象とした。自由記載の内容を一文ごとに取り出し類似したもので分類し、研究者間で検討し、カテゴリー化した。

3) 倫理的配慮

調査の主旨、目的と回答の拒否をしてよいこと、また、拒否した場合も今後の大学・学生や地域との関係に影響しないこと、さらに結果は統計的に処理し個人が特定されないことを説明し、了解を得られたアンケートを分析の対象とした。アンケートは、無記名とし、郵送で回収した。

4 結果

配布数は71名、回収は70名で、有効回答率98.6%であった。実習協力者の年齢は、33歳～88歳、平均64.4歳であり、70歳代が26名(37%)と最も多く、次いで60歳代15名(21%)、50歳代12名(17%)、40歳代8名(11%)、80歳代7名(10%)、30歳代3名(4%)の順であった(図1)。

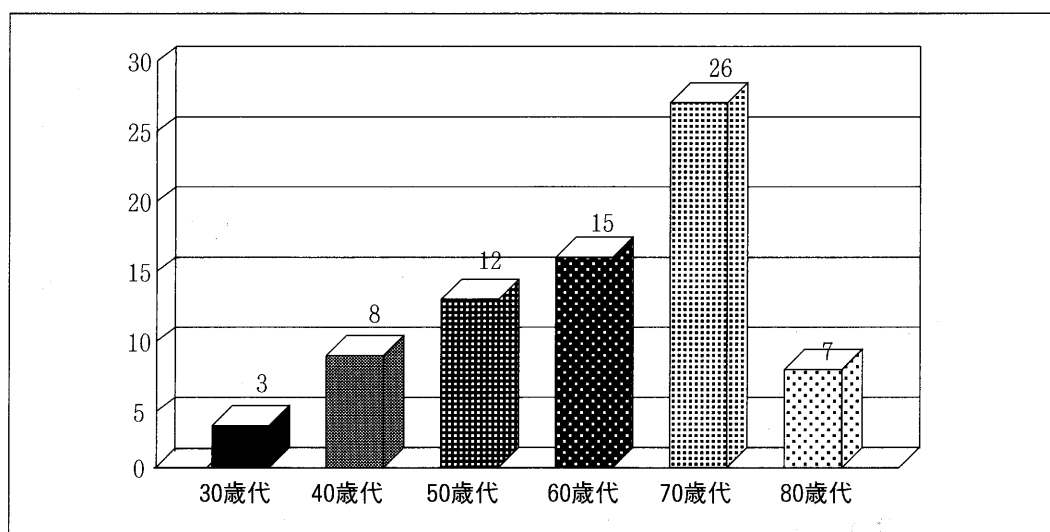


図 1. 実習協力者の年齢別人数

1) 実習協力者の学生受け入れの受けとめ方

実習協力者の学生受け入れについての受けとめ方は、表 1 に示す通り、＜良かったと思ったこと＞があると答えたのは 67 名 (95.7 %) であり、＜困ったと思ったこと＞があると答えたのは 1 名 (1.4 %) であった。また、＜困ったと思ったこと＞はなしと答えたのは 62 名 (88.6 %) であった。＜困ったと思ったこと＞があるともなしとも、いずれにも記述がなかったのは、7 名 (10 %) であった。

表 1. 実習協力者の学生受け入れの受けとめ方

	あ る	な し	無回答
良かったと思ったこと	67 (95.7)	1 (1.4)	2 (2.9)
困ったと思ったこと	1 (1.4)	62 (88.6)	7 (10)

N=70(%)

実習協力者が、学生を受け入れて＜良かったと思ったこと＞と＜困ったと思ったこと＞の記述件数は、全部で 109 件であった。そのうち＜良かったと思ったこと＞の記述が 108 件 (99.1 %) であり、＜困ったと思ったこと＞の記述は、1 件 (0.9 %) であった (表 2)。

表 2. 実習協力者の受けとめ方の記述数

	良かったと思ったこと	困ったと思ったこと
件 数	108 (99.1%)	1 (0.9%)

N=109 (%)

2) 実習協力者の＜良かったと思ったこと＞

実習協力者が、学生を受け入れて＜良かったと思ったこと＞の全記述 108 件は、話す機会がもてた満足、対話のできた満足、若者に対するイメージの変化、健康への意識、看護・学生への期待、大学の理解の 6 カテゴリーに分類された（表 3）。

最も記述が多かったカテゴリーは、＜話す機会がもてた満足＞ 34 件（31.2 %）であり、次に＜健康への意識＞ 23 件（21.1 %）、＜対話のできた満足＞ 22 件（20.2 %）の順であり、＜若者に対するイメージの変化＞と＜看護・学生への期待＞が、各 13 件（11.9 %）であった。また、＜大学の理解＞の記述が 4 件（3.7 %）あった。

表 3 実習協力者が＜良かったと思ったこと＞の記述数

カテゴリー	記述件数
話す機会がもてた満足	34 (31.2)
対話のできた満足	22 (20.2)
若者に対するイメージの変化	13 (11.9)
健康への意識	23 (21.1)
看護・学生への期待	13 (11.9)
大学の理解	4 (3.7)

N=108(%)

カテゴリー別に、その記述内容を見みると、表 4 に示す通りであった。

- (1) ＜話す機会がもてた満足＞は、実習協力者が日頃思っていることや考えていることを、学生に話すことができた・学生が自分の話を聴いてくれていたというものであった。

内容は、「若い方とお話できて、楽しかった」、「話すことができて満足だった」、「入院の経験、医師・看護師と接した折の話をよく聴いてくれた」、「戦時中の体験話を真剣に聴いてくれた」、「年輩者として願うことなども話すことができた」、「子育て・生き方を伝えられた」などである。

- (2) ＜対話のできた満足＞は、実習協力者と学生との双方向のコミュニケーションができたと感じているものであった。

内容は、「成長した子供からみた親について話し合い（対話ができ）満足であった」、「学生と同じ年齢の孫と話せなかったが、いろいろなことが話し合えた」、「人生について語り合えた」、「若い方と本音で話合えた」である。

- (3) ＜若者に対するイメージの変化＞は、実習協力者が学生と接して、若者の肯定的

な面を捉えて、今までの若者のイメージを変化させているものであった。その変化も若者を肯定的に捉えるものであった。

内容は、「純粋な気持ちで勉学に励んでいる若者もいる」、「相手を気遣い・礼儀が正しく・きちんとしている」、「若者の生活や考え方がわかった」、「若者とこれからも接したい」との記述であった。

- (4) <健康への意識>は、日常生活の中での健康について、新しい発見や今までの生活に意味を見いだしたものであった。

内容をみると、「日常生活の反省と今後の指針に役立った」、「健康であることが、何よりの幸せと気づくことができた」、「自分自身の健康を再確認した」、「自分のできることを、できる今、していきたい」、「育児に張り合いが出る気がします」、「若いエネルギーをもらった」、「長生きしたい」である。

- (5) <看護・学生への期待>は、学生と接して、看護職としてこのように育ってほしい、このような看護師になってほしいとの看護専門職への期待と人間としての成長を期待するものであった。

内容は、「患者が安心できる看護師になってほしい」、「すてきな・立派な看護師になってほしい」など、また、「希望・目標をもって生きていってほしい」、「将来が楽しみ」、「人に信頼される社会人になってください」など、学生へのエールが記述されている。

- (6) <大学の理解>は、本大学への理解もあるが、看護大学そのものについて理解できたというものであった。「大学ができたことは知っていたが、内容を知らなかった」、「看護大学の内容や卒業後の進路のことが理解できた」、「大学を身近に感じた」である。

3) 実習協力者が<困ったと思ったこと>

<困ったと思ったこと>の記述は、1件(0.9%)であり、その内容は「学生が積極的に話さない。話に困った」という学生のコミュニケーション技術、対人関係の持ち方に関するものであった。

表4 実習協力者が＜良かったと思ったこと＞の記述内容

カテゴリー	件数	記述内容
話す機会がもてた満足	3 4	○若い人と話すことが、楽しかった ○自分の思い、考えを話すことができて満足 ○人生の先輩として話す機会がもてた満足 ・年配者としての思い、考えを伝える ・子育て（母親）の思い ・生き方を伝えられた満足 ○自分の話すことを真剣に聴いてくれた ○話しながら自分の人生を確認できた
対話のできた満足	2 2	○年齢を越えて、対話のできた ・孫と話せなかったが、同年代の学生と話し合えた ・若い人と本音で話合えた ○人生について語り合えた ○成長した子供からみた親について対話のでき満足
若者に対するイメージの変化	1 3	○純粋な気持ちで勉学に励んでいる若者 ○相手を気遣い・礼儀が正しい ○しっかりした考えをもって生活している ○きちんと生活している ○若者とこれからも接したい
健康への意識	2 3	○自分自身の健康を再確認した ○日常生活の反省 ○今後の生活の指針に役立った ○健康の大切さ、幸せに気づいた ○自分のできることを今、する大切さ ○育児への張り合い ○長生きしたい ○若いエネルギーをもらった（若返った）
看護・学生への期待	1 3	○看護者として期待すること ○よい看護者に成長するであろうとの期待 ○人間・大人として期待すること
大学の理解	4	○看護大学の理解 ○身近な大学としての実感

5 考察

1) 実習協力者が＜よかったと思ったこと＞

実習協力者が、＜よかったと思ったこと＞は、実習協力者にとって、学生と関わる中で、楽しいという満足感や何かのできたとの充実感がもてたり、新しい気づきをし

たりしていることであった。

＜話す機会をもてた満足＞は、実習協力者が人生の先輩として、自分の経験、思い、考えを十分に語る機会つまり自分を表現する機会を得て、満足した時間を過ごしていることが推察される。この場面では、学生は実習協力者の話に耳を傾けるよき話の聴き手になって存在していると考えられる。実習協力者にとって学生の受入は、自分自身についての過去や現在の出来事や体験に対する思いや感情を自由に表現できる機会であり、自己理解の促進⁷⁾につながる場となっている。

また、＜対話ができた満足＞は、対象者の経験や生き方の話題等を手がかりとして、学生と意見交換をし、お互いが聴き手・話し手の役割をとり、対話ができたものである。この場面では、実習協力者と学生の双方に＜対話ができた満足＞があることが重要である。そして、学生のコミュニケーション技術が問われるところでもある。対話の成立には、両者がお互いを受容し、場面により聴き手と話し手との役割を、お互いがバランスよくとっていることが必要である。学生の受入れで＜困ったと思ったこと＞の記述が、「学生が積極的に話さない」1件であったことを踏まえると、学生の関わりが極端に不十分であったとは言い難い。さらに、＜対話ができた満足＞との実習協力者の認識からは、自分の生活、健康への思いや考えを語ることが、自分の現状認識であり、過去の自分についてのイメージや自己の可能性や未来のイメージ等を客観視して自己理解を進化・拡大している状況である。これは、援助として⁸⁾の学生の関わりがあった場面として捉えてもよいのではないだろうか。

実習協力者の＜話す機会をもてた満足＞と＜対話ができた満足＞との反応からは、学生の受入れが負担であったり、緊張が高く重荷であったりというマイナスの影響だけを危惧しなくてもよいことを示唆しているといえる。

＜健康への意識＞は、2つのパターンがある。1つは、「自分自身の健康を再確認した」にみるパターンである。健康に強い関心をもち、日々の中での健康によいとされる取り組みを実践しており、その実践を学生に紹介しながら、その実践の重要性を再確認している場合である。2つ目は、「日常生活の反省」、「今後の生活の指針に役立った」、「健康の大切さ、幸せに気づいた」、「育児への張り合い」に示されたように、学生と関わることで、意識していなかった健康に気づき、健康を考え、日常生活を見直し、日々の行動への刺激となっている場合である。

いずれの場合も学生に話すことを通しながら、自分の日々の行動や習慣が、自分や自分の周囲の人にとっての健康を維持、増進するためのものであるという意味を確認している。このことにより、今まで十分にできていた行動や習慣の継続への意欲につながり、不十分であった行動や習慣に対しては、反省を含め生活をあらためる意識が生じる。学生は、地域で生活する人々が、日頃健康をどのように考え、行動し、生活

しているかを理解し、実習協力者は自分の生活や健康への理解を深めている。つまり、両者にとって、プラスの効果を得ることができている。

＜若者に対するイメージの変化＞は、日頃、学生と同年代の若者と接することが少ない高齢者が多かったため、外見から捉えていたものによるイメージの変化である。学生と話しあい、行動を共にすることで、今までのイメージと違った面が見え、若者を理解する機会となっている。これは、学生が、実習協力者を理解するためには、自分たちのことを理解してもらうことが必要と考え、大学生活の現状、看護大学に入学した動機や看護・保健職を目指すという将来の目標、大学生として自立を目指す思いや感情を、実習協力者に話していることも影響していると考えられる。これらの場面で、実習協力者は、＜大学の理解＞と学生の生活の一端や考え方を理解し、看護・保健の専門職を目指す学生に対して、人生の先輩として、また看護・保健や医療の利用者としての立場から＜看護・学生への期待＞を込めてのメッセージを発信している。

一方で学生は、実習協力者との対話を通して、＜高齢者のイメージの変化＞⁹⁾を学びとしている。活動の減少や孤立といった高齢者のイメージから、地域社会とのつながりを持ち、積極的な行動をしている高齢者の姿を捉えて、異世代の理解をしている。実習協力者と学生の双方でのイメージの変化、しかも肯定的なイメージへの変化は、自分と異なる他者の存在に興味・関心を持ち、理解を深め、受容する他者理解の大切な過程である。

2) 実習協力者が＜困ったと思ったこと＞

実習協力者が、＜困ったと思ったこと＞は、わずかであったが、学生のコミュニケーション技術、対人関係の未熟さであった。多くの学生は、親と子の関係、兄弟との関係、友人との関係、教師と生徒の関係が、今までの主な対人関係を築く経験である。今回の実習のように、見ず知らずの人と看護学生として関わることは、初めての経験である。

どのような位置に自分が立ち、どのような関係を築くのが、はっきりしないまま、実習に臨んだ学生やもともと人と話したり、関わったりすることが、苦手な学生には、戸惑いが大きかった。実習協力者が、この学生の状況を理解して関わることは、容易ではなく、また実習協力者に求めるものでもない。そのため、看護学概論やオリエンテーションで、コミュニケーションの学習を行い、1回の訪問終了後にも場面の再構成を用いながら、コミュニケーションの振り返りやロールプレイをしての指導を行っている。しかし、訪問のその場に実習指導者が存在しないことで、適切な時に適切な助言をすることは難しい。ここに、学生だけで実習をしていることによる実習の限界がある。実習（訪問）場面での直接の指導には、限界があり、指導者が不在であるこ

とによるリスクもあることを承知し、実習前での準備や実習終了後に振り返る時間を、学生と教員でとり、十分なディスカッションするなどの指導の工夫が必要である。また、学生自身が、自ら解決しなければならない状況であり、解決していく力を学生がもっているまたは力をつけていくと信じ、教員自身が落ち着き、指導することも必要である。

3) 地域での基礎看護学実習における課題

学生が、地域で生活する人を訪問する実習は、「実習協力者が体験とさまざまな思いと感情を表出し、自己理解を促進する機会になる」という面をもっている。実習協力者にとって、この実習が自己理解を促進する機会となるためには、学生の関わり方が重要な鍵となっていることを、学生および教員が意識して、実習に臨むことが必要である。さらに、実習指導のあり方は、学生が実習協力者の体験や思い、感情を表出できるような環境を作れることと、実習協力者が表出した事柄に対し受容できる姿勢の基本を身につけて、実習に取り組むように準備することである。この目標の達成は、4年間の看護基礎教育の目標ともなる部分であり、初期の学習段階である基礎看護学実習までに「できる」ことは難しいと考える。しかし、他者を尊重すること、他者への関心をもつこと、他者を理解することに焦点をあて、実習協力者と向き合うことや他者の話を傾聴するという姿勢をもって実習に臨み、実習を通してこれらの必要性和重要性を理解することは可能である。ここが、本実習のねらいとするところでもある。

地域での基礎看護学実習をするためには、コミュニケーション技術の向上は必須であり、実習場面のみでの指導ではなく、学生が体験したことの意味を考えられるような教員の関わり、指導を充実させていくことが重要である。また、学生の学びの有無と内容だけに着眼した評価ではなく、実習協力者の学生受入の反応をさまざまな角度から捉えた結果も含めて、実習の成果を評価し、実習のあり方を検討することが今後必要である。

6 まとめ

実習協力者の実習についての受け入れの反応としては、〈よかったこと思ったこと〉に、現れるように肯定的な反応として見られるものが多かった。そして、実習協力者が自分の経験・生き方を語る機会であり、日常を見直し、健康を考えるきっかけとなっていた。さらには、10歳代後半から20歳代の学生を通じて、実習協力者もまた学生と同様に、異世代の理解をする機会となった。

実習指導の課題は、生活、健康、環境のキー概念の理解を促すことと合わせて、コミュニケーションや家庭への訪問のマナーについての事前オリエンテーションの展開方法ま

たは、基礎学習との関連を確認することである。

さらに、学生が実習協力者とともに、個々の健康や生活の質の向上また地域社会との関わりを考えられる実習となるようにすることが重要である。そのためにも今後、この実習での学び、気づきを、その後の学習に継続し、発展させていく方法や実習に協力をいただいた地域との連携のあり方を、検討し、具現化することが必要である。

謝辞

本実習は、地域の方の協力と地域の方々の大学への理解と地域に根ざした大学の存在への期待そして、なによりもそこで学ぶ学生達への看護・保健職へと成長することの期待に支えられていると感じています。日常の生活の中に、学生を暖かく迎えてくださった自由ヶ丘地区の皆様に、心から感謝いたします。

本研究は、第22回日本看護科学学会学術集会（東京）2002. 12. 7で発表したものに、修正、加筆したものである。

引用・参考文献

- 1) 河原宣子、川出富貴子、前原澄子：生活者重視の看護実践力を育む教育―「ふれあい看護実習」を通して― 第20回看護教育学会抄録集 日本看護協会 p.41～43、1999
- 2) 外村由美子、赤塚隆子：地域で生活している人を対象とした基礎看護学実習の考察、看護展望、医学書院、Vol.26 No. 3 p.105～110、2001
- 3) 平木民子、大本眞由美：地域住民への訪問実習における学生体験記述の特徴―基礎看護学実習の実習記録の分析から―、日本赤十字広島看護大学紀要、2号、p. 23～32、2002
- 4) 村本淳子：1年次からの地域に根ざした段階的看護学実習―「ふれあい実習」に焦点をあてて―、Quality Nursing Vol.10 No.1 p.79～83 2004
- 5) 二重作清子、谷岸悦子、本田多美枝・他：地域における基礎看護学実習の取り組みと今後の課題―実習の学びに対するレポート分析―、日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report、第2号 p.132～144 2003
- 6) 二重作清子、谷岸悦子、椿原久美子・他：地域における基礎看護学実習の取り組みと今後の課題、日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report、第1号 p.49～59 2002
- 7) 小野幸子：老年者の自我発達を促す看護援助、Quality Nursing Vol.3 No.10 p.14～20 1997

- 8) 同上7)
- 9) 前掲5)
- 10) 市川昭午：未来形の大学 玉川大学出版 2001
- 11) 上野昌江、津村智恵子：大学での地域看護学実習の現状と課題 保健師雑誌
Vol.41 No.10 p.814~823 2000
- 12) キャスリン B. ゲイパーソン・他、藤原裕美子監訳：臨地実習のストラテジー、
医学書院、2002
- 13) 島内節：大学・大学院における地域看護学教育のあり方、保健の科学、第45巻、第5号、
p.132~136、2003
- 14) ローズマリー R. パースィ、高橋照子訳：健康を一生きる一人間 パースィ看護理
論、現代社、1988